ドイツにおけるペッテンコーファーとコッホの有意義な生誕祝賀式典

松下 敏夫¹ (紹介者), ベアーテ・ヴォンデ² (原著者)

¹ 鹿児島大学

² フンボルト大学ベルリン森鷗外記念館

Significant Birthdays of Pettenkofer and Koch Celebrated in Germany

Toshio MATSUSHITA¹ (introducer) and Beate WONDE² (author)

¹Kagoshima University

²Mori Ōgai Memorial Center, Humboldt University of Berlin

この資料は、2018年にドイツで行われた Max von Pettenkofer と Robert Koch の生誕記念祝賀事業に関して、フンボルト大学ベルリン森鷗外記念館の Beate Wonde 氏が、私信として提供してくれた情報である。本学会会員にも興味ある有益な情報と考え、本人の承諾を得て、原文の一部を補綴して資料として紹介する次第である。

なお、原著者のベアーテ・ヴォンデ氏の多彩な日独文化交流活動や、フンボルト大学ベルリン森鷗外記念館に関しては、ホームページを参照されたい。

松下敏夫 (鹿児島大学)

ドイツにおけるペッテンコーファーとコッホの 有意義な生誕祝賀式典

ベアーテ・ヴォンデ

(フンボルト大学ベルリン森鷗外記念館)

2018年も終わりに差ししかかった頃、ドイツでは森鷗外の師であり医学史における功労者二人を偲ぶ会議があった。12月3日はマックス・フォン・ペッテンコーファー (Max von Pettenkofer, 1818–1901) 生誕200年の日であり、同11日はロベルト・コッホ (Robert Koch, 1843–1910) 生誕175年の日であった。立て続けに催しが企画されたことで、ライバル関係にあった二人の25歳という年齢差が特別際立った。この二人は全く違う性格であっただけでなく、違う世代に属していたのだ。

ペッテンコーファーの祝賀式典は、12月3日にドナウモースのリヒテンハイムにある彼の生家横に建つ胸像に献花することで幕を開けた。この式典には、市長のほか郡知事や住民らも参加した。ペッテンコーファーの出

身地は、インゴルシュタットやニュルンベルクの近くに位置するノイブルク・アン・デア・ドナウの傍にある。この辺りは痩せた平地で、沼地の水を抜いて開拓された土地だ。彼の生家はもう残っていないのだが、数年前に復元され、碑文が添えられている。

当日午後には、ノイブルク・アン・デア・ドナウの職業学校がペッテンコーファー学校と名付けられた名前の授与式が行われた。同校の生徒はこの日のために「ペッテンコーファー石鹸」を作っており、これから1年間ペッテンコーファーについてさらに学ぶ予定だ。

授与式に引き続いて、医学史家のヴォルフガング・ロッハー教授が講演を行った。教授は、今年7月にペッテンコーファーの伝記『Max von Pettenkofer Pionier der wissenschaftlichen Hygiene (マックス・フォン・ペッテンコーファー：衛生学の先駆者)』(ドイツ語)を出版している。

なお、カール・ヴィーニンガー氏によるペッテンコーファーの伝記は、1987年に出版された。植木絢子氏によって2007年に日本語に翻訳され、『知られざる科学者ペッテンコーフェル—環境医学の創始者—』という邦題で知られている。そこには森本兼義氏と松下敏夫氏による序文が添えられている。

夕方には、ベルリン森鷗外記念館のキュレーターである私・ベアーテ・ヴォンデが、「モース・ハウス HAUS

im MOOS」において「ペッテンコーファーと日本の弟子たち」という題で講演し、主に緒方正規、中濱東一郎、小池正直、坪井次郎、後藤新平に関して述べた。

同月 6 日から 8 日にかけてはミュンヘンにおいても祝賀式典が開催されたが、その中で特筆すべきは 2 つのシンポジウムだろう。ひとつは国際的な学術シンポジウム「感染生物学—感染症学 2018—マックス・フォン・ペッテンコーファー生誕 200 年を記念して」で、もうひとつは「マックス・フォン・ペッテンコーファーと 21 世紀における彼の意義」だ。そこでは、ペッテンコーファー賞の授与式も行われた。同賞は 2017 年に創設され、バイエルンの大学、専門大学で提出された衛生学と医学微生物学に関する優れたディプローム、学士、修士、博士論文に対して授与されており、賞金は 5,000 ユーロである。

また、ミュンヘンの市立博物館では、新たな特別展「チフスの街ミュンヘン: ペッテンコーファーとミュンヘン」が開かれている。

ベルリンでは、ロベルト・コッホの 175 回目の誕生日を記念した式典が彼の名を冠した研究所の図書閲覧室で催された。ここは 2 年前にロベルト・コッホ研究所の設立 125 周年を祝して連続特別企画「ロベルト・コッホ・

サロン」が行われた場所で、その時は、各々の登壇者たちが赤いソファに座り座談会を行った。

今回の式典では、感染症部門部長のマルティン・ミールケ教授が具体例を示しながらコッホの功績を称えた。続いて、同研究所所長のローター・H・ヴィーラー教授が、コッホの曾孫にあたるヴォルフガング・プフル氏にインタビューを行った。プフル氏の祖母ゲルトゥルトは、コッホの唯一の子供である。インタビューの中で、コッホ家は、ロベルトが少年時代を過ごしたクラウスタールにある家を買戻して復元したことが述べられた。同式典はロビーと展示室でのささやかなパーティーで締めくくられたが、お土産として小さなテレビ型ミニのぞき眼鏡が配られた。ボタンを押すといくつかのコッホの写真を見る事が出来る仕掛けだ。

今日、マックス・フォン・ペッテンコーファー研究所とロベルト・コッホ研究所は協働関係にある。ロバート・コッホ基金による優れた研究を発表した後進者に授与するポスト・ドクター賞の 2018 年受賞者は、ミュンヘン大学マックス・フォン・ペッテンコーファー研究所に在籍するウイルス学者マクシミリアン・ミュンヒホフ博士で、受賞の研究テーマは HIV 感染の解析であった。